

里子

永代 美知代

「兩國ステエションの雑踏と云ったらない。それも其筈で、今日はもう、押しつまつた歳暮の二十八日と云ふ數へ日だもの。」

今、午前十時幾分の上り列車が着いて、赤毛布だの、頬冠りだの、山のやうなかさ高な荷物を背負ったのだの、押し合ひへし合ひ、吾れ勝ちに開札口へと集った。その中から、小兒を負った一人の小母さんを見付けようとして、須磨子も孝子も一しう懸命氣を配り眼をみはつて居た。平常から人一倍神經過敏で、わけても此頃殆んどヒステリックになつて居る須磨子は、見も知らぬよその婦人が小兒を負つて、人込みの中を押されもまれして來るのを見ると、はつとして、丁度其脊中の小兒が我が子の千香子でてもあるやうに、其都度あつあつと聲あげた。

「見付かつたの、どれ何處に。」

最初の中は孝子も須磨子の聲に胸をどらして、斯う訊いて居たが、小母さんや千香子ではない、見も知らぬその母子を一々氣にして騒ぐのだと知つて、馬鹿々々しいことに思つた。

見ても、見ても、終に小母さんらしい影さへ見つからない。

「如何したんだらう、もう來さうなものだに……」須磨子は心配で堪らぬといつた風で、

「ねえお孝さん、それとも矢張り二番でせうかねえ。」

「當り前さ。ハガキにもちやんとさう書いてあつたぢやありませんか。それに、あなたは自分で心配ばかりしてゐるんだもの、知らない。」

須磨子だつて、孝子の云ふのを無理だとは思はない。今日小母さんから受取つたハガキにも二番で發つと書いてあつた。だが一昨日の朝九十九里へつれて行かせた小母さんの乳を、どうしても千香子が呑まない、泣いて泣いて、家内中總掛りですかしても機嫌をとつても、どうしても泣きやまないし、牛乳をあてがつても、これも飲まない、若しかして其内には馴れるかとも思ふけれど、さうして居るうちに蟲を起して、疳の病にでもなると大變だから、折角預つて置いて、たつた三日やそこいらでこんな事を云つては、如何にも辛抱甲斐も頼まれ甲斐もないやうで、誠に心苦しいけれども、明日の二番でつれて行くからと云ふのだもの。あの親切な小母さん夫婦のことだ、泣く兒を香氣に抱へては居られなう、二番で行くと書くには書いたが、夜の明けるのを待ち兼ねて、一番で來るかも知れない。と斯う須磨子には考へられた。ハガキを受取つた時も、孝子が、まあ、そんなに周章でたつて仕方がない、十二時半着の二番列車迄には充分時間もある事だ、と落着き拂つてゐる、その態度が冷淡なやうに思はれて怒つた。でとうとう二人は着物も更へず、平常着のままで家を出て來た。

だが矢張り小母さんは二番列車で來るのらしい。

二人は二等の待合室へ入って来て、暖爐にあぐらまいたり廣告の油繪美人を見たり、千香子がお腹がすいて泣いてるだらうの、二日もお乳を飲まなくて瘦せたらうの、病氣を起しては居ないかのと、ひそひそな話を仕合ったり、驛夫にちろちろと眼をつけられたり、散々道瀬無、さまの悪い思ひをし

た。
「斯うしてたつてつまらない、まだまだ時間があるんだから、本所の、とら、及川とか云った家へ行つて見ようぢやありませんか、昨日の朝断りのハガキを出したばかりだから、若しかしたら、まだ何處からも小兒を預つてないかもしれない。」

「ええ、だけでも駄目よ、油屋だつて云ひますもの。」

須磨子は一週間ばかり前、田舎の親類へ相談事に行つた歸途、及川のお神さんと云ふのと、ひょっこり汽車に乗り合せて、お神さんが須磨子の抱いて居た千香子を頻りにあやして、自分も丁度千香子位迄育て上げた男の子をなくして、今日は田舎のお寺へ初七日のお参りをして来た處、おまけに一人ッ兒ではあり、如何にも寂しくつて堪らない、良人に相談して、都合で里ッ子をとつて見ようかと思ふ。と斯う問はず語りをした。その時には渡りに舟と喜んで、先方の名前を訊き、此方の番地を知らして、是非良人と相談して返事を呉れるやうにと頼んで別れた。それから返事のハガキが来るまで、どうか然うした家へ預けたい、商賣で預かるのと違つて、我が兒をなくした其かなしみを忘れようためだから、どうしたつて振ひが違ふ。さうすれば千香子も仕合せだし、安心もして居られる。それで及川々々と思つて居たが、二三日後にハガキが来て、本所某町及川油店としてあるのを見て、急に二の足をふむやうにな

つた。孝子を初め親類の者も、同じ東京うちで便利ではあり、此家へ預ける方に賛成が多かつたけれど、如何しても須磨子は氣が通まないのて、一月程前小兒をなくして九十九里の方から、下女のやうにして来て居た戀意な人の神さんが、まだ乳が出ると云ふのを幸に、頼んでつれて歸つて貰つたのだ。
「好いぢやないの油屋だつて何だつて、兎に角、どんな風に生活して居る家か、そつと見て來ませう、その上で氣に入つたら預ける事にして。ねえ。」

「ええ、ぢや行つて見ませう。」

途々歩いて居る間も、小兒を負つた女を見ると、驚いたやうな風で須磨子は時々立ち止つた。

「あッ驚ろいた。」

「如何したの。」

「だつて小母さんによく似てたんですもの。」

「馬鹿な、今頃何だつて小母さんがこんな處を歩くもんですか、あなたの神經過敏にや驚ろわ。」

交番で聞いたたり、散々人に尋ねてやつと某町を探して來て見ると、二間口の小さな店頭一杯に石油罐を積み重ねて、三尺ばかりの庭からやつと出入りをするらしく、汚い冷飯草履が、足と、水色の唐衣の鼻緒のすがつた、お神さんのらしい日和下駄とがぬき捨ててあつた。

「嫌だ、それ御覽なさい、あんなに石油罐を積んでるんだもの。」

「何が嫌なんだらう、此位なら好い方だと思はなきや、どうせ里ッ子でもとらうと云ふんだから、あなたの理想通りの家つてのはありませんよ。」

「私、別に理想なんか無いわ、けどももう少し安全な家を選び度い。」

「まあまあ」と孝子は二三軒先きまで通り越して、又引返し、油屋の隣りの傘屋へ「今日は」と聲を掛けて其店頭へ寄って行ッた。

「は。仕事をして居た五十餘りの老爺さんが一寸手をやめて、此方を振り向く。」

「すみません、買物ぢやないのよ、あの少し物を伺ひ度いんですがねえ、お隣りの油屋さんねえ、里ッ子を預るッて本當。」

「左様々々、お神さんが寂しがッてね、何しろ一人ッ子をなくしたもんだから、いッを里ッ子をとッて見たらなんて、そんな話もありやしたね。」

「まだ預ッてやしないでせうか。」

「のう婆さん、油屋さんぢやまだ預ッてやしめえ。」

「何だい。」人の好きな婆さんが薄暗い次の間から出て来て「何ですか此間中の話ぢや今にも女の兒を預るやうに云ッてましたがね、汽車で乗り合したお兒だ相て、まだ来ませんよ。」

「まあさうですか、其後他に話はありませんの。」

「さあどうですか、それッきり何の事も聞きませんが、何ならそッと聞いて来てあげませうか、あなたお預けなさりたいんですか。」

「いいえ。どんな風な方でせうねえ。——なにね。油屋さんぢや御家内が多いんですか。」

「なに夫婦きり、それに小僧を一人使ッてますがね。まことに堅い人達で、二人共すぐ此埼玉に田舎が

あるんですの。こがひから初めて、あれ丈けの店にしたらんですから、人間は大丈夫ですよ。お神さん

も氣のやさしい人で、私共でも懇意にしますがね。」

「まあさうですか、いろいろねえ、——突然にとんだ失禮ばかり。それぢや何れ又。」

何だか要領を得ない挨拶をして、歸りにまた一寸油屋の店頭をのぞいて、

「如何。やッぱり嫌。」

「さうねえ、好いやうだけど、私如何もあの石油罐が氣になッて仕方がない。」

「をかしな方。何故だらう。」

「だッて若しかして火が入ッて御覧なさい、小僧がマッチを摺ッて、間違ッて石油罐の上にも投ッたら大變だわ。」

「仕様のない神經過敏さん。そんな事があるもんですか、そんなこと一々氣にしてた日にや、何處へだッて里ッ子に呉れられやしない、田舎の百姓家へやれば糞壺へ落ちるし、紺屋へ行けば藍甕へちッこちて死ぬてせうよ。」

冷かされて須磨子は、かッとした。自分の子だッたらさうは云ふまい、今に赤ん坊を持つて思ひ當るが好い、此情無し。斯うは思ッたが又、孝子の實家がランプ屋で、石油をも兼ねて賣ッて居るのを思ひ出して、年中庭や店頭へ石油罐が積まれて居れば、自然馴れッこになッて、さう危険にも感じないのかも知れないと思ひ返した。

併し油屋だの紺屋のやうな家へは、千香子を里ッ子に出さうとは、どうしても思はれなかつた。

二度目にスエラシ、ヨシへ歸つて来た時は、一度二番の上り列車が着いたところでもう七分方開札口から出て居た。

「さあ大變、遅れたわ、お孝さん如何しませうねえ。」

「大丈夫。」

須磨子がまた甚く氣を揉み出したので、孝子は先に立って、いざいざ開札口の方へ歩いて行つた。

「奥様々々。」

振り返つて見ると、小母さんが千香子を負つて、あしめの入つた大きな信玄袋を重さうに引抱へ、待合室の出口の處で呼んで居る。

「あら小母さんだ、お孝さん、もう出てるのよ。」

あなたまた駆け寄つて見ると、千香子は泣きもせず、併し寂しさうな顔をして、まじりまじり賑やかな四邊を見廻して居た。

「お、千香ちゃんや。」

須磨子が顔を寄せて頼摺りしようとする、千香子は反對の側に向き返つた。たつた二日の間にもう見忘れたのか、聲を聞いてさへほうほう云つて喜んだものの、と須磨子は泣いても足りないやうに思つた。

「如何したの、千香ちゃん、そら叔母ちゃん居たでしよう。」

今度は孝子が笑顔を突き出して、小母さんの肩に置いた千香子の手を執つて、いつものやうにあやし

て見たが、矢張り黙つて、一寸口なめづりみたいな事をして、よそを見て知らん顔して澄して居る。

「極りが悪いのよ、二日も逢はなかつたんだもの、ねえ千香ちゃん、だけでもね、もう母ちゃんどこへ歸つたのよ、ねえ好いでしよう。」

孝子は頻りにあやしたけれど、千香子は矢張り、そつばうばかり見て、振り向かうともしない。「忘れたんでせうか。」

「大丈夫だつてばさ。母ちゃんを忘れて好いものですかねえ千香ちゃん、恥かしいんですけど仰有いよう、母ちゃん氣を揉んで可笑しいね。」

「えええ今に元々になりますよ、餘りいろいろに纏るもんだから、赤ん坊でも矢張り心配なんでせう。」と小母さんも口を入れて「ねえ千香子さん、笑つて須磨、奥様、あなたお乳を見せて御覽なれ。」

「ええ、さうね。」

「まあまあ立つてちや仕方がない、それに小母さん、そんな大きなものを抱へてちや重くつて不可ない。待合室へでも入つて腰掛けませう、さあその荷物を此方へあよこし、私が持つて行くから。」

「いいえ、此位なもの、私が持つて参ります。」

待合室へ来て、小母さんの背中から千香子を下して、孝子は暫く抱いて居たが、須磨子が胸を開いてお乳を出す、

「さあ久し振りで母ちゃんのおっぱいあがりなやい。」と須磨子の膝へ置く。

母の顔と乳房と、見比へ見比へして、飲まうともじなかつたが、須磨子がにっこり笑つて、乳房を

かんでちゆうと少しばかり搾り捨てて、お口へ入れてやると、可愛い手ていつものやうにお乳を搦て搦て、満足相に母の顔を見上げて、ごとごと飲み初めた。

「おいちいてせう、千香子さんは母さんのでなくちや嫌なのねえ。」

「本當にねえ、御覽なさい小母さん、あのまあいし相に飲んでること。」

二人の話を聞きながら、須磨子は千香子の手首を握って見て、甚く瘦せたと思った。

「まあこんなに瘦せて。」

思つた事は何でも、時の場合も考へずに、待てしばしもない、直ぐに云つてしまふのが須磨子の癖だ。孝子にはッとしたが仕方がない。

「當り前だわ、ねえ小母さん、乳を飲まないぢや、随分御困りでしたてせう。夜中泣かれて、どんなにか氣を揉んでらッしやるだらうと思つて須磨さんとも云ひ暮したのよ。」

「ええ、晝間はねえ、如何にか斯うにか機嫌をとつて居ますけれど、夜になると私の乳は上らないし、牛乳もお嫌だし、幾らあかりをともしても、ほかにまぎれるものがないもんですからねえ、お泣きなすつて、如何したら好いかと思ひましてねえ。」

「左様でせうとも。」

「それに此お兒は、まだ誕生前だと云ふのに、中々母さんをよく知つて居て、もう他の者のお乳は些少も上りません、私は初め、私の乳が年寄のだから嫌なのかと思つて、近所の若いお神さんのを貰つて見ましたが、矢張り駄目です、上らないんですよ。」

「さうですかねえ、そいぢや母ちゃんも油屋は嫌だと云ふし、仕方がない、里の口もなさ相だから、千香ちゃん、離れないで喰附いてらッちやい。」

「本當に私、もう何處へも出さないで、困るか知れないけれど、やれる丈け自分でやつて見ようと思ふわ。」

須磨子は全く離れ度くないと思つた。

「左様なさいましよ、父様が居なくなつて、以前の家を越した時から、奥様が里ッ子の話をもち出しになると、もう直ぐ蟲が知らせるんでせう、千香子さんたら無暗に母さんをしたつて、あとばかり追ッてらッしやいましたもの、ねえ。」

「母子だもの、ねえ千香ちゃん、無理もないわつて左様仰有やい。」

孝子がいだらしいと云つた風に頬摺りすると、千香子は乳房を離して、母の胸に頭を寄せ掛けて、此兒の癖の、ちろり横目を選つて、何とも云へぬ可愛い態を見せて笑ひ掛けるのであつた。(完)